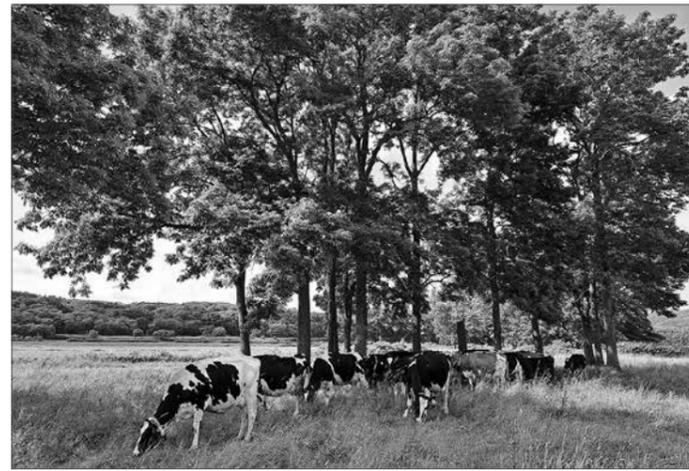


横浜っ子が築いた持続可能な農業 着実な経営管理で得た大きな成果

放牧酪農のモデル事例を創った中川町の丸藤牧場

新規就農者の受け入れに積極的な上川管内中川町で、横浜市内のサラリーマン家庭で育った夫婦が16年ほど前から放牧酪農に取り組み、自給飼料の給与や放牧に適した牛づくりなどを通して「持続可能な農業」を実現している。北海道酪農の厳しさばかり強調される時代にあつて、多額の負債も償還できる目途も立った。10年先を見すえた事業計画書の作成など着実な経営管理が成果を上げた大きな要因のようだ。毎日の仕事のかたわら、放牧志向の酪農家らによる交流会の開催や情報交換、就農希望者からの相談…と、活動のすそ野は広い。地域農業を牽引する存在になった同町の丸藤牧場の歩みと放牧酪農の取り組み、今後の展望などについて話を聞いた。

(ルポライター・滝川 康治)



夏の放牧風景。牛たちは木陰でくつろぐ(丸藤さん提供)

新規就農者の牧場で知り合いの中川町内での放牧酪農を実現
修了後に浜頓別町へ移住した丸藤さんは、町内の酪農ヘルパー利用組合や牧場で4年余り働き、就農のチャンスを探る。そのころ、町内の新規就農者の牧場に通う中で、ボラバイトをしていたひとりの女子学生と出会う。管理栄養士をめざしていた、現在の妻・沙織さんである。

体も慣れてきましたね」
実習開始から間もなく、中標津町在住の三友盛行さんの著書『マイペース酪農(農文協)を読んだ。「自然の力を利用し、不足する分を少し投入するような経営が一番効率がよいと考えました」
宗谷管内浜頓別町の池田牧場の資料にも目を通し、「放牧酪農で儲けることができるんだ」と開眼。長いスパンの中で自然の力を活かせる道をめざすことにした。

しかし、目標は決まったものの、訓子府には放牧に適した物件がなく、就農までに農業機械の取り扱いなどを習得する必要もある。そこで実家に戻り、02年春から1年間、神奈川農業アカデミーの酪農コースで学ぶ。必要な学費は半年間、ハム工場夜勤の仕事をやって調達した。
同アカデミーの農場研修では、前出の池田牧場を希望。原付バイクを購入して北海道まで運転し、2週間の実習に励んだ。季節は秋。昼夜放牧をしているので、朝晩の搾乳以外にはたいした仕事はない。
「これで年間1千万円を稼げることに、すごく魅力を感じましたね。あらためて『放牧で新規就農したい』と思うようになりました」



中川町内で新規就農の夢を実現した丸藤英介・沙織さん夫妻。帯広農業高校に在学中の長男・睦さんが将来、地元に帰って牧場を引き継ぐ予定という

理系を志向し、経営にも関心来道し放牧酪農で就農めざす
中川町内を流れる天塩川の西側に広がる丸藤牧場は、2008年秋に産声を上げた。それから16年余りの歳月が流れ、今では72ヘクタールの草地で68頭の乳牛(うち搾乳牛は48頭)を飼い、年間280トンほどの生乳を出荷する放牧酪農家として堅実な経営を続ける。
経営主は丸藤英介さん(76年、横浜市生まれ)、沙織さん(84年、同市生まれ)夫妻。
「夫婦で話し合い、酪農や家事、育児の役割分担をしてきました。働かすぎず、家族の時間を大切にしていきたい」(英介さん)
「田舎暮らしは苦にならないほうで、近所には同世代の女性もいます。自然いっぱいいるところで子育てできるのは楽しいですね」(沙織さん)
牧草主体の放牧酪農が評価され、一昨年には農林水産祭の内閣総理大臣賞(畜産部門)を受賞するなど、多くの農業関係者が注目するモデル的な酪農を続けてきた。道北地方に新規就農した人たちが心の拠り所にする牧場でもある。

サラリーマン家庭に育った丸藤英介さんは高校時代、自分が理系向きの人間だと自覚する一方、経営の分野にも関心があった。法政大工学部の経営工学科に進み、23歳の時に卒業。就職活動もやってみたが、とくに就きたい仕事はなかった。
そんな中、万年助教だった恩師が、「一度きりの人生だから、好きなことをやれよ」と励ましてくれた。自宅と会社を往き来する生活よりも、自然の中に身を置き、体を動かす仕事に合っているのでは…と思うようになった。競走馬関連の就職試験も受けたが、そこは厳しい世界であり、みずからの甘さを痛感したという。
大動物を扱う分野で経営者になれるのは、酪農に限られると分かった。有楽町にある北海道農業担い手センターの出張所を訪問する。そこで紹介してもらった実習先は、搾乳牛80頭ほどを飼養するオホーツク管内訓子府町の牧場で、2000年秋から1年弱、実習生活を送った。
「ちょうどコンサイレイジ(発酵飼料)を調整する、1年でもっとも大変な時期でした。最初の1週間は辛かったけれど、それを乗り越えらる



事務局を担当した「もっと北の国から楽農交流会」のひとつコマ(22年9月撮影)

「丸藤さんは、パソコンも達者で、エクセルを駆使して作業日誌の作成や飼料の管理などをこなし、オンラインも活用しています。地元地域おこし協力隊員や現場職員らとも仲が良く、先方も頼りにしている」

中標津町にある道総研の酪農試験場と共同で、事業計画書を作成するプロジェクトにも取り組んだ。フォーマットは、北はるか農協の組合員HP上で閲覧できるという。

就農時の規模は、42ヘクタールの草地に搾乳牛が46頭。導入した乳牛は、すぐに出産ラッシュを迎えた。沙織さんの初出産と重なり、3カ月間にわたり、母親が家事などの応援に駆けつけてくれたという。

丸藤牧場の草地の半分は泥炭地であり水はけが悪く、カリウム分の欠乏もあり牧草の嗜好性が悪かったとい



天塩川の西側に広がる丸藤牧場の看板

う。「肥料など資材を」低投入でできる酪農を」と考えていたが、そのままでは農地の生産性が低い。そこで、就農後の数年間は暗渠排水などの土地改良に取り組み。中川町には改良を支援する補助金があり、活用した。しかし、土地改良を進めても圃場は湿地のようになり、放牧に適した牧草が減っていく。化学肥料を投じながら肥培管理をすると、収量が増え、植生も改善されたが、やはり牛たちの嗜好性は良くない……。

そこで、自家産の堆肥と購入した発酵鶏糞を使い、2年前から有機的な肥培管理に転換。昨年は、牧場の約8割に相当する59ヘクタールの草地の有機JAS認証を取得した。「うちの場合、嗜好性の良い牧草を収穫する延長にある有機認証なんです」(英介さん)と力を込める。

5月上旬から9月いっぱい昼夜放牧のあと、10月下旬まで昼間だけの放牧を続ける。丸藤牧場の濃厚飼料平均給与量は日量2〜3キロと控えめだ。粗飼料の草は放牧とラッピングしたサイレージなどで対応し、搾乳牛1頭あたり年間6千3百キロの生乳を生産してくれる。全道平均の6割ほどの乳量に相当するが、草の

と話すのは、5年前に中川町内で新規就農を実現した川和秀仁さん(87年、東京都生まれ・次号で紹介予定)。先輩の生き方をお手本に、この町に根づいていく。

活動的な丸藤さんは、新規就農者や放牧酪農に関心をいだく人たちの交流にも努めてきた。

牛・土・草の観察を基本に年1回、ベテラン農家や研究者の助言を受けながら泊まり掛けて酪農のあり方などを学ぶ、「もっと北の国から楽農交流会」の取り組みを本誌で紹介したことがある(22年11月号を参照)。交流会には20年ほどの歴史があり、放牧酪農を実践する新規参入者や、就農をめざす人たちなどが参加。フィールド研修や座学、懇親会などを通して交流しあう。

今では参加者のすそ野が広がり、道北とオホーツク管内あわせて4地区でローテーションを組み、毎年、交流の場を設けている。中川地区での開催時には、丸藤さんが事務局を担ってきた。この交流会の常連組を中心に放牧のLINEグループ(メンバーは3百人ほど)もあり、冬場を中心に交流を図る。活動の屋台骨になっている一人が丸藤さんである。

今年1月末現在、中川町の人口は1265人。多くの過疎のまちと同様に今後も減り続ける中で、家族経営の15牧場と1法人が酪農を営み、前者の半数ほどを30〜40代の新規就農で占める。そんな土地柄なので、新規就農者の受け入れには積極的だ。町や農協、農業委員会、農業改良普及センターなどをつくる「中川町新規就農者誘致促進対策協議会」は、

自給率が高いので手取りは多い。品種改良が進んだ牛よりも、穀物の給与量が少なくても済み、獣医師の手を煩わせることの少ない牛づくりをめざしてきた。今では、そうした牛たちが全体の7割ほどを占めるまでになったという。

「ここ数年は、獣医師の手が必要な繁殖関係の治療はゼロ、分娩や乳器に係わる事故も少なくなつた。牛たちの心が健全でないと、良質の生乳やお肉はできません。僕は常々、人と牛が心身ともに健やかな牧場を創ろう」と考えてきました。今後、穀物が日本に入つてこない時代がきても、そうした状況にも耐える牛づくりをしたいですね」

独自のフォーマットも作成して事業計画を基に経営内容を分析

現在の農業所得は年間1100万円ほど。総額で9千万円近かった負債は、今年中にすべて完済できる目途がついたとそう、きわめて秀逸な



フリーストール牛舎の中で餌寄せ作業をする丸藤英介さん



丸藤牧場の生乳を原材料にした牛乳とチーズ。「道の駅なかがわ」ではソフトクリームを販売している

経営事例といえるだろう。学生時代から経営について学んできた丸藤さんは「今後10年以上にわたる、牧場のキャッシュフローや事業計画を作成することが重要」と力説する。そうした作業の積み重ねによって、「大きな変化があった時には計画を見直し、多少の変動には対応できるわけです」と。一般の農家にはなかなか真似のできない、堅実な経営手法だと思ふ。